

浄土

二月号

—浄土高僧物語—



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認可雜誌第三五二号)
昭和三十九年一月二十五日 印刷 昭和三十九年二月一日発行

第三十卷

第二号

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄 著

一枚起請文をめぐって

新書版一〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……觀念の念仏を排す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を

申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……

二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺

訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行所

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二二一八七番

香りたかき浄土トラクト — 既 刊 —

選択集私解	大正大学教授 大文 竹中 信常著	新書版 価 120円 120 P 30円
真理のはなたば	大正大学教授 大文 佐藤 良智著	新書版 価 70円 20 P 20円
日常勤行式の解説	大正大幹事 村瀬 秀雄著	新書版 価 100円 90 P 20円
信仰への導き	大正大学教授 大文 佐藤 賢順著	B 6 判 価 15円 16 P 10円
ご法語のしおり 月影抄さ 葵ぐ	大正大幹事 村瀬 秀雄著	B 6 版 各冊 価 15円 16 P 10円
浄土宗のおしえ	大正教授 大助 宮林 昭彦著	新書版 価 25円 20 P 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に 多数申込みには割)
信実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (332) 5944
振替 東京 82487

二 月 号



十方に浄土おほけれども、西方を
ねがふは、十悪五逆の衆生もむまる
るゆへ也。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 シッダルト太子出城図

随 想		(2)
涅槃の句	 林 真 彦	(4)
〔特集〕 浄土高僧物語		
ご前さんの家計簿	 角 野 達 堂	(8)
近世文名録 岩井智海大僧正	 高 橋 良 和	(16)
近代高僧伝 桑 田 寛 随	 大 橋 俊 雄	(24)
.....		
童 話 お月様の誕生		(20)
茶の湯に 生きた人々 松 平 忠 輝		(22)
.....		
学会手引 最近の浄土信仰批判		(6)
紹 介 岸覚勇著「略説浄土宗義史」		(7)
ご法語をいただく	 (19)	教区だより..... (26)
かえでの実	 (27)	表紙の解説..... (32)
中国浄土教 物語 浄土を説いた経典	 牧 田 諦 亮	(28)

無常ということ

一条 智 光

(善光寺大本願住職)

春夏秋冬移りゆく天地自然のすがたにも、日々マスコミによって報ぜられる明暗さまざまの事柄にも、諸行無常の御教が頭をかすめるのですが、誠にあてにならぬのが人生の習いであります。私が心の底から人間とは儚ないものであり、怒ったり、ねたんだり、貪ったりする事の何と空して浅間しい事かと無限の感慨に打たれた一瞬が最近ありました。

それは当山の藤尼の事です。さる十一月六日昇堂の所列先導の折突然倒れ不帰の客となったのです。誰しもよろけたり、ころんだりする経験はありますが、その瞬間にきまりわるそうに起き上るものです。それが起きようともせず私の「大丈夫か」との問いに「少し工合がわるくて」と答えはあってもすでに足の自由がなかったように思いました。あとは心ならずも周囲の人にまかせ私は昇堂しまし

同一の死あるのみです。

宗祖法然上人が「人の命は食事の時むせて死する事もあるなり南無阿弥陀仏とかみて南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」と仰せられた御言葉が、しみじみと身の引きしまる思いで有難く戴けるわけであります。それにしても、何ともろいものだろう、むかしから死の縁無量と云われているが本当にその通りだ、私共常に死は目前にありとの覚悟を定める事が大切であると自問自答した事です。

殊に今日では交通地獄と云われる都市の有様を見聞するにつけ、人命軽視の風潮の流れる御時世を思うにつけ、今日只今健やかに、生かさせて戴いている私に今更ながら感謝を禁じ得ません。何時如何なる事に出あっても、悔いない心がまえを持って、一日一日を喜びの中に過したいものであります。

信心決定とも、安心立命とも云うのは死の問題を解決する事の出来たところを云うのはありますまいか。

平生念仏。そうだ及ばずながら実践致したい。そしてその妙味を知るべきで所謂、冷

訳して伝え難い時は、原のことばそのままを用いることがしばしばある。「ねはん」もその一つである。その意味するところは深い。もろもろのわずらい、なやみの滅するところという素朴な解釈も早く行われる。

安住の境地がねはんの境地であることには間違いない。世は常に騒然として止ることがない。人も亦時をえらばず安らかにあることは得難い。もしそれにあやまりが無ければ、安住の境地は尊いものであろう。生にわずらわされず、死にわずらわされない人が若し存すればその人は尊い。世尊こそそのような人であった。それ故に世尊なのである。

しかしその上に更に深い境地がある。安住の境地に安住せざる境地。これこそ一層深い境地なのである。ねはんは安住の境地であることには間違いないが、この安住の境地に安住せず、よろずの人々が安住の境地を得る迄、自分の安住はないとの境地が一層高い安住なのである。専門のことばは言う。不住処涅槃と。

ねはんの世界は内寂ではあるが、完全なる

た。

晨朝法要中も大した事がなければと、身此所にあれども心ここにあらず、の思いで念じました。しかし下堂してみれば既に、昏睡状態で九分通り見込なしと、宣言され体から力のぬけて行く思いの中にも、凡人の思いきりのわるさと云うか、奇跡を念ぜずには居られませんでした。この儚ない願いもしりぞけられて七日未明遂に天寿つきて西化したのであります。思えば藤尼は、十二才の時入山して六十才を迎える今日まで、約五十年間御仏に奉仕し、私共の身の廻りの事も親切に何くれと世話をして、常に誠をもった物静かな実直な人柄でした。私の小さい時には共に遊び、共に学んだなつかしい思い出の人と今はなったのです。まさまざと見せつけられたこの現実、諸行無常の御教を涙の中に幾度もかみしめたのであります。

生ある者は必ず滅すと、之は私共の経験より来た事実であり知識であります。私共の一呼一吸は実に墓場に進む行進曲です。貴賤老若男女賢愚痴鈍の区別なく、窮極する所は只

自知の道理をよくよくかみしむべきだと思えます。暑い寒いと申しても自ら感じて初めてその度合がわかる様に。

昨日まで共に語り、共に話あった藤尼のあまりにも儚ない死に直面して、生ある現在を大切にすると同時に、私のかぎりある今後の人生を護法の為にも、仏恩報謝の為にも有意義に過さねばと心に誓った次第であります。

もろともにあをき守らん濁る世の

やみちをてらす法のともし火

「ねはん」

佐藤良智

(文庫、大正大学教授)

二月は梅花かほる月である。百華、各々に、美わしさがあるが、梅の美わしさは格別である。凜冽の季節にふくよかに香うそのかほりもまた高雅である。

この梅の二月は仏者にとって大切な月である。「おねはんさま」と言って釈迦牟尼世尊のすがたを変え給える月である。世尊の円寂し給える月と伝える。仏法には、その原意を

静かさではあるが、真の静かさは、静止ではない。あだかも廻る独樂が静止するように見えるが実は動いているように、真のねはんは実は動いているのである。万人の幸せのために動きつづけているのである。これが安住せざる安住。不住処涅槃、涅槃の真のすがたである。

法然上人のお念仏の安心もこれと全く同じと受取るべきであると思われる。御念仏の安心も、凡夫である至らない自分等を絶対に救いとして下さるといふ絶対の安住の境地に導いて下さる。この安心の境地はいつもいつも私共のところに宿っている。このありがたい境地がありがたければありがたいほど、自分だけに満足してはならない。「願くは諸の衆生(人々)と共に、安樂国に往生せん」と言う御経文は何をお示しになっているか。こころして読誦させて頂かなければならない。万人の仕合せがあるところに、自分の仕合せがある。これが仏者の最後の安住の境地なのである。今や真の涅槃、真の念仏の真価が発揮さるべき時である。

随想

涅槃の句

林 真 彦



○
白い水仙の花が一輪、前机の上に生けてある。

内 藤 鳴 雪

える神秘的な姿だ。

ますぐなる香の煙や涅槃像

松本たかし

古寺や昼も灯ともす涅槃像

うす暗い本堂わきの書院の床の間に、大きな古い、彩色された涅槃像が掛けられている。陰暦の二月十五日。

蠟燭の光が、臨終の釈迦が沙羅双樹の下で頭北面西、右脇を下にして横臥している姿にまたたいている。

金色の釈迦の姿がほのぼのと美しい。

八 幡 城 太 郎

金色のにぶきひかりや涅槃像

西 山 泊 雲

剝落の尚金泥や涅槃像

沈香のゆたかな香りがただよっている。神神しいまでに思

い。
少年の頃の涅槃会の思い出は、うらがなくもまた美しい。

私は大正も初期の頃を東海の海の美しい、そして富士の清らかな姿の見える土地で、明け暮れを過した。その頃の街のおもかげはもうない。

東京で生れ、まもなく移住して育った土地であり、一番思い出の多い少年の頃を過した街であるが、その頃の街のたたずまいは今もうない。戦災で灰になってしまったのだ。

たまに第二の故郷に帰っても、戦禍を受けた街には思い出をさそうなものも残ってはいない。ただとまどうだけだ。

思い出はただ頭の中にだけ生きている。

○

二月は逃げてゆく寒さと云われ一年中で一番寒かった。陽ざしも思いなしか灰色にぼやけている。だが旧暦の二月十五日頃はそろそろ時たま暖い日も、また軟い風も吹いて来る。海に近い街には冬の間は強い名物の西風が吹きつづけている、だが涅槃会の前後一週間ほどの西風は寒さもやわらいでくる。

八幡城太郎

釈迦堂のわたりの冷えや涅槃西風^{ねはんにし}

「嫌天下と西の風」とよく云われるが、この頃の西風は春を呼ぶ暖さをふくんでくる。

星野立子

涅槃西風庫裡の障子戸開けて訪ふ

これが「お釈迦さまの涅槃風」とも云われ「涅槃西風」とも云われるもの。

萩原麦草

涅槃西風やすまずに生簀吹にけり

春がもう近い。まち遠しい春だ。

○

街の東に寝釈迦山と云われる山がある。涅槃の釈迦の姿を思わせる山である。ゆるやかな姿は平安を思わせる。

後藤夜半

大顔をむけたまふなる寝釈迦かな

阿波野青畝

葛城の山懷に寝釈迦かな

春雨にけふる山の姿はゆったりとしている。少年の頃見たその姿は今もなお思い出に生きている。

静かな雨の降る日の涅槃会もあった。書院の床の間の大きな大きな涅槃像の軸、静寂の姿の釈迦像、ゆらぐ燈明の光、高く低く聞える読経の声、春の魁の涅槃会。

母はこの涅槃会の為に両三日前から、お正月の餅をあられの様に砕いて金網の四角な籠で炒っている。炒豆もまじってこれが「お釈迦様の鼻くそ」と云われているものだった。

お詣りに来た子供達に一つかみずつ与えられた。子供達は不思議そうにうすぐらい涅槃像をながめている。

芝不器男

御灯のうへした暗し涅槃像

お釈迦様の金色の寝姿の周囲には弟子をはじめ、天竜・鬼畜・百獣・禽鳥類が、泣き悲しんでいる姿が描かれている。

お釈迦様の入寂を悲しんでいるのだ。だのに猫はその中にいなかった。猫は魔ものだからと母は説明してくれた。

小松月尚

わが好きの猫がをらぬや涅槃像

最近の浄土信仰批判

学会の新聞である聖教新聞は、最近大分内容が変ってきている。特に目立つのは、数年前までの、どんな大病でも「おまんたら」を拝めば癒る式の邪教談話や記事が少なくなり、一般の新聞と同様な社会記事や、家庭、娯楽の記事が増えてきている。世間から、邪教呼ばわりされる反省が、こうした方向に転化させているのであろう。

既成仏教に対する邪教呼ばわりも、それ程目立たなくなってきた。然し、やはり、そうした邪教呼ばわりが、信者を奮起せしめ、又獲得して行く最短距離である為、三回に一回位の割で、これに類した記事が、出てくる。浄土信仰批判で、直接浄土宗にぶつかっているのは、最近では、九月二十四日号に「なぜ念仏は邪宗教か」というのと、十月十日号の「幸福をむしばむ邪宗教」という見出しのとの二つである。(十一月十五日現在まで)

どちらの記事も、大同小異で、十月号「折伏の手」の所で紹介したものの以上には出ていない。即ち

(1)三部経は方便経であるから、法華の真実教には及ばない。方便経で

ある三部経に依る浄土宗は邪教である。

(2)聖道門をすてて、浄土門を取った法然の立場は、正法である法華経を誹謗(ひぼう)しているのであるから、念仏を信心しても、しあわせになる筈がない。日蓮の言う如く、無間地獄に落ちる。

この二つに尽きると言って過言でない。この事は、前にも述べた如く、自己の信仰を、釈尊一代の教えの中のどれに重点を置くかによつての相異であり、日蓮が法華に置いたのに対して、法然上人は、方便経である三部経に置かれた事からくる違いである。それは、末代の衆生に、もっとも分り易く、入り易い教えであったからに外ならない。したがって、われわれにとって、最勝最善のものであることはいうまでもない。

日蓮は日蓮の立場に立って、それを最勝、最善としたものであつて、そこには、立場の

違いがあつたとしても、究極的な違いがあるわけでない。同じく、釈迦一代の法門の中の教えであるからである。勿論、創価学会では、釈迦は、最早や過去の人として、釈迦に替る人としての日蓮を絶対とする。法華経にある「仏」という語は、すべて、日蓮に置き替えてしまふ。「仏説」とあれば、すべて「日蓮の説」とあるとするのであるから、全く無茶な話である。信仰と言へば、それまでも知らぬが、それでは余り、歴史的事実を無視した話である。「仏説」は何処までも「仏説」であつてこそ、仏教なのであつて、学会の論から言えば日蓮教であるに過ぎない。それでいて、浄土教はどうのこうのというのも、おかしい事と言わねばならない。

「念仏を信仰すると、現世をあきらめきつた無気力な人間ができる」ときめつけているが、われわれは、一つもそうした念仏信仰を持っていない。むしろ、念仏生活の中にこそ、此の世での生活に生き甲斐と、力を感じ取っているのである。こうした間違つた教えを受けている学会員こそ、哀れという外ない。

略説浄土宗義史は、岸覚勇氏が専修道場首座として在任中研究された当時の成果を出版したもので、略説と云うのは、元祖大師以下西師に至る祖師方の遺著全巻の概容を探り、その要旨を略説されておる為である。

即ち元祖が善導大師の御疏の一心専念の文によって浄土を開宗されてより、第八祖西師が示寂されるまでの八代にわたる二百六十五年間における宗義の推移、及び各祖師の浄土宗々義の特色、即ち、一語

岸 覚勇著

略説浄土宗義史

ずつを以て之を云えば元祖大師の捨閉闍抛の選択義、鎮西国師の聖浄二門兼学義、記主禪師の異解破斥の相承義、白旗、名越等の業成論義、問西二師の随他扶宗義等々それぞれの義を明確にされようと努力しておられる。この略説浄土宗義史は、各章ごとに注があり、又、結語が入っている章があるなど、全体的に教科書形式で大学の学部で浄土宗義史の講義等に参考書として適当と思われる。

特に元祖の出世年代について、当時の鎌倉時代の時代背景にふれながら述べられて

いる処は、現代人にわかり易いと思う。又善

導大師の浄土教と法然上人の浄土教との差異が実践行の場合において明確によく理解出来る。元祖は偏依善導と云い乍らも、其の浄土教義の純化、念仏の絶対価値への向上と云う点に於いて新生面を開く事を忘れられなかつた点と、元祖の最大功績は浄土教の独立であると述べ、元祖以前の浄土教は天台或は三論に閉じ籠つての信仰であつたが、元祖に至つて初めて旧宗を捨てて新しく一宗を別開され

た点を明確に述べられている。そして元祖が八十年の生涯を念仏弘通、人類救済に一貫され、日本国民としての人道を實踐されたことを説いておられる。即ち、元祖は往生要集を繙いて浄土門に入り、それを先達として善導の観経疏を披らき、初めて末世濁惡の凡夫の出離の要道は弥陀の本願たる称名念仏に在ることを知り、立ち処に余行を捨てて専修の一行に帰し、浄土一宗を開かれた次第が述べら

れている。

又、三心論の解説にしても、三祖記主禪師時代の高僧の三心論をあげ、結びに記主禪師をあげておられるところは、三心に関する浄土門の当時の高僧の解釈がよく理解出来る。なお目次順に並べると、第一章の元祖大師の

浄土教以下、第二章の鎮西国師の浄土教、第三章の記主禪師の浄土教、第四章の記主門下六派の浄土教、第五章の聖問禪師の浄土教、第六章の聖聰上人の浄土教迄、歴代各上人の浄土教が講義形式で書かれており、全体を読み終った感想は、丁度一年間大学で浄土宗義史の講義を聞いた後、試験前にノートを読み返した時の様な気持である。ただ附録の紙上座談会（往生についての座談会）は各祖師方の御考がよく出ていて面白いが、この略説浄土宗義史の本の性格から申せば、第六章の聖聰上人の浄土教で終りにして置いた方がよりすっきりしたものになったのではなからうか

（編集部）

（三重県四日市市六呂見町

観音寺中 記主禪師鑽仰会 発行）

ご前さんの家計簿

—秋浦定玄カミナリ大僧正伝—

角野達堂

(京都新聞論説委員)

先ごろ、仏教大学が開学五十周年の記念式、図書館増築の祝典を行なったときだった。記念行事に、同大学歴代学長の筆墨展を催すから、秋浦定玄大僧正の筆墨を出品してほしいという依頼があった。秋浦僧正は、同大学の前身・浄土宗専門学院長として明治三十六年から同三十八年まで在職したからである。

が、私の手もとには、何一つそれにふさわしいものは残っていない。ただ、上下ケイのある和紙をつづり、僧正が表紙に「放行把住」としたためた一冊子があるだけだった。

「放行把住」は、明治四十四年七月から大正二年七月までの満二年間、僧正が記録した毎月の収支簿である。〃気まま

な生活のメモ〃といった意味であろう。私は請われるままに、その冊子を仏教大学へ届けておいた。

展覧場には「秋浦定玄僧正の筆」として、冊子は紙でおおって並べられていた。名僧、高僧の見事な軸物が並ぶ一ばんはじめの方に置かれた冊子は、つつましやかに、目立たずにひかえている。主催者側の高僧のプライバシーを衆目にさらすのはいかがかとする、暖かい配慮が加わっていたのかもしれない。しばらく私は冊子のあたりをうかがっていたが、披見するひとは一人もなかった。

秋浦僧正の蔵書は「秋浦文庫」として、同大学の書庫に保管されている。〃家計簿〃を出品するより、あの中から適当

なものを探し出した方がよかった、と私は少々後悔めいたものを感じた。が同時に、久しぶりにこの冊子を公けの場で見えて、あまり名前の売れていない、いわば高僧仲間からはずれた感のある秋浦僧正に対する、こみ上げるなつかしさを覚えた。

× × ×

秋浦僧正は弘化元年（一八四四）に生れた。もう百二十年ほど前のことである。嘉永五年（一八五三）に得度、十三歳のとき、師僧の大本山黒谷金戒光明寺法主就任にしたがって、京都の黒谷本山に登った。翌々年から増上寺に入って宗学を学ぶこと十年余、再び京都へ帰り智積院で俱舎唯識を学んだ。

明治六年（一八七三）には、わずか三十歳の若さで福井県の大寺、敦賀・西福寺の住職となり、同三十二年（一八九九）に黒谷本山の六十世法主に就任している。

幼いときから、すごい秀才だったという。のっけから大本山格の西福寺住職になったのも、逸材の名声が認められたからであろう。「わしは初めからご前さまじゃった」というのは、僧正が弟子たちにもらした自慢だった、と聞いている。

私の父である師僧は、秋浦僧正について西福寺で得度し、師の黒谷法主就任にしたがって、山内の小さな一坊に住し

た。孫弟子であるというわけであろうか、僧正は私をたいへんかわいがった。私には少々それが有難迷惑でもあった。毎日夜食の給仕に召し出されたからである。私たちは僧正のことを「ご前さん」と呼んでいたが、まだ小学校へもいかない幼い私は、夕方まで広い境内で遊びほおけて、お給仕の役目を忘れるのがしばしばだった。側近連は手分けして私を探し求めた。私がいないと、たいそうご前さんのご気げんが悪かったからである。

そんなことから、私には幼い記憶のご前さんの風格や日常生活が、楽しい影絵のように残っている。そして、それとさきの家計簿とが折り重なって、まぶたに浮ぶのである。

× × ×

記憶に残るご前さんの評判は、たいそう悪かった。周囲の坊さんのなかには「あのカミナリのカギ」と口ぎたなく悪ばを放つひともあった。「カミナリおやじ」というのが、通称になっていたようである。

じじつ、ご前さんは、たいへんなカンシヤクもちだったらしい。腹にすえかねることがあると、大声できびしく怒鳴りつける。ときには実力を行使する「暴力法主」でもあった。だれそれがナグられた、といううわさを私は何度も耳にした。

しかし、家計簿にあらわれたご前さんは、ひどくきちょうめんで、おおらかな性質のように見える。おそらくご前さんは、前々からきちんと日常の収支を記する、厳格な学僧らしい習慣を続けていたのであろう。私のもつ一冊は、先月残金から初まっているところからみて、晩年の最後のそれであったと推察される。私が給仕の奉仕をした時期は、この冊子記入の途中から、筆をとめたあとに及んだものと推算している。

ケイの上欄は収入、下欄は支出の部である。墨筆でていねいにしたため、誤記、誤算は朱筆で訂正している。月末には収支決算、残額を翌月に繰り入れるのは型通りだった。

収入は、末寺住職や信徒から献上された供養料、菓子料、法礼、回向料がそのすべてであった。月に平均すると、だいたい百円ぐらいだろうか。支出欄からうかがうと、当時の物価は、月桂冠一斗代七円八十銭、ビール一ダース二円八十五銭とある。軽卒に貨幣価値の比較をするのは危険であるが、今は当時のざっと千倍と考えられよう。法施だけで月百円の収入は相当なものである。

家計簿の日付けが示すように、ほとんど連日、この種の施入があった。ご前さんの部屋は、これらを持参するお客さんでにぎわっていたことを覚えている。そんな時のご前さん

は、柔和な気品のある風ぼうで、まるで絵から抜け出たような大僧正ぶりだった。部屋のなかには、主客のうちとけた和気あいあいのふん囲気にみちていた。ご前さんの肖像画は、東京下谷の英信寺に伝わっているはずだが、坊さん流にいえば、なるほど「衆生縁万点」であったにちがいないと思わせる美事な画像である。

父の実家の当主は「あんなりっぱなご前さんを、カミナリだとケナす坊さんたちの気が知れん」と、ご前さんの弁護に力んでいた。私も、幼な心でそれに共鳴した。それほど私にとっては、やさしい、いいおじいさんだった。給仕のおダチンに、到来した上等の菓子をふんだんにくれた。

じじつご前さんは、たくさんの施入を気前よく散じている。支出のほとんどは、各山との交際費、末寺住職や信者への贈答、返礼、葬祭のお供えに消費された。私的な日常出費は、衣服、洗たく、裁ほう、除髪、仏具、弟子の学資、書誌、医薬の代金など、必需の用にかぎられている。晩しゃく用の酒、ビール代が、いささかのうるおいになっているにすぎない。さすがに、日常の使いっぶり買っぶりは、すこぶるおうようだったようである。酒なら一斗ダ、ピンで半ダースを、デンと並べるといったふうである。夕食の給仕には、べる私は、ご前さんが盃をほすたびに、徳利をさし出してつ

いだ。時々コボすのを、ご前さんはおもしろそうに笑った。晩しゃくは、たしか二本だったと記憶する。

身辺費のなかで比較的カサばって見えるのは、法衣、衣服代である。日常のご前さんは、いつもピカピカする純白の着物姿だった。光る純白のヒフをまもっていたこともある。羽

二重づくめだったのだろう。独居の部屋にあっても、つねに端正、清雅な身ごしらえであったことは、木戸ご免^{ごめん}だった幼い私の目にはっきりうつった。

ひとり居のご前さんは、いつも正座の姿勢で、机に向って書見するか、あるいは、目をつむって何やら口の中でブツブツいっていた。ご前さんの平生念仏

だったのだろう。ご前さんが日常手にしていたじゅずは、その没後、ご前さんのところへしばしば伺候していた薬剤師の津田重興氏に伝わった。後年、津田氏は「わが一生の宝」である、私に語っていた。じゅずのタマは、たゆまぬ唱名の跡をとどめて、尊くすり減っていたのである。

たった一度だけ、崩した姿のご前さんを見かけたことがあ



る。いきなり部屋へはいると、ご前さんはシビンで小用を足していた。私の記憶に残るご前さんは、少々中気の風であった。その病気が、こうじた時かもしれない。私ははじめて、ご前さんの肉体の一部を見て、強烈な驚異の印象を受けた。それは、大器の人物はすべてにおいて大器である、ということである。

家計簿も、とうとうと流れ込み、どしどしハケさせる大器の観がある。しかしハケ切れないいくらかが、ほとんど毎月残った。しぜんに組まれた「健全財政」だった。ご前さんは、その「貯めた」のではなく「貯まった」お金を、二年間に百円ずつ二回、吉田郵便局にあずけていた。薬剤代が、あとほど多くなっているところからみると「単身世帯」の行く末に備える心づかいがあったのかもしれない。

支出欄に、食費の項目が見当らない。ほとんど毎月「角善払い」としてかなりまとまった金額がしるされているのが、それではないかと想像される。

ご前さんの食べ物は、すごく塩ッからい味付けだったナマフ、ユバが好きだった。「常さん」と呼ぶ御側用人が調理役だった、しょうゆだけで煮上げていたようである。料理の最中に常さんは、ツマミ食いの味見をして、私にもときどき食べさせてくれた。それが私の大きな楽しみだった。ついで、魚、肉類の姿は見かけなかった。

ただ毎夕、ご前さんはユデ卵を二個ずつ食べるのがしきたりであった。幼い私の心には、このご前さんの「スタミナ食」が、とてもゼイタクでうらやましく思えた。

ご前さんは、卵の白味をサラに残し、黄味に塩をつけて、パクパクとおいしそうに食べた。ゼンをさげたあと、残った白味をパクつくのが、私に与えられた「公認の役得」だった。黄味を食べているとき、私がゴクリとツバをのみ込んだのに気がついたご前さんが、白味の処分権が私に属することを宣言してくれたからである。

病氣への憂いのほかに、家計簿には暗い影はちっともさし込んでいない。八畳ほどの部屋の中で、ご前さんは、ゆとりのある、静かな生活を送っていたようである。法主としての用事といえ、来客との応接、法要への出座、末寺の大法要に招かれて出かけるぐらいだったらしい。大阪へ事務所の執事を同伴して再三行ったことが、家計簿からうかがわれる。

もらったお布施は収入欄に記入し、事務所が立てかえた旅費はあとで精算して、きちんと返済している。公私の別は厳重であった。

ときおりご前さんは、ひとりでランプの「うらない遊び」をやっていた。きちょうめんな日常生活のうるおいである「レジャー消費」であったのだろう。

× × ×

多少物心がついてからの私の判断によると、カミナリの恐ろしさを体験した周囲の坊さんのうちに、二つの型があった。一つの型の人々は、カミナリの恐怖が骨身に徹し、燃えるにくしみとうらみの火を、消しかねていたようにみえる。カミナリのちょうりょうぶりを、やや遠くからながめていた人々のうちにも、この型の人が多かったようである。もう一つの型の人々は、げんにカミナリの被害を受けながらも、夏の雷雨のように、一過後のすがすがしさを満喫して「いいカミナリだった」となつかしく追憶する。にくたらしい思いを味わなかったわけではないが、一目も二目も置いて「法雷」のとどろきを受けとめていたようである。

両型の人々の批判を総合した結果、私はご前さんのカミナリは、相手によって落とし方がちがひ、かなり変幻自在な性質をおびていた、という結論に達した。無軌道にあれば回る

カミナリではなく、偉力は十分にセーブして発揮され、及ぼす影響についての「読み」も含まれていた、と推定している。

つまりカミナリは、ときには僧職者に活を入れるムチとなり、ときには「法主の權威」を示す利器ともなった。じっさい両型の人々とも、ご前さんのまえへ出ると完全に平伏低頭し、ひたすらにご気げんの平らかならんことを願う様子だった。三十歳の若さで、末寺数十カ寺を擁する大寺に住したカミナリおやじに、これくらいの統率の才がなかったはずはない、と思われる。

ご前さんの家計簿が豊かになったのは、黒谷に住してかなりの年月を経てからであつたらしい。新まい法主でなじみの少ないころ、よく散ずるご前さんは、年ンがら年中ピーピーだったという。

私はご前さんが愛用した藤製の寝イスを保存し、今でも夏になると風通しのいい所へ持ち出して、いこいの場に行っている。五十年間以上にわたって使用にたえるのは、よほどの上製なのであろう。そのころ藤イスが、最新の高級ホーム・ベツトとして、ひじょうに流行したということである。ご前さんは大分これに心をひかれたらしいが、家計簿はまだその支出を許す状況に至らない。

そんな時に、時期はずれのカミナリがひん発する。広い境内を巡視して、あそこがきたないここが汚れていると、事務所の職員を呼びつけて怒鳴りつける。法要開始の予定時間がわずかに遅れたのをガナリたて出座せぬとダダをこねる、というぐあいである。

執事長は、何かある、と内々探りを入れたあと、うやうやしく伺候して言上する。「近ごろ寺務所に使い道のない金が少々余っておりますので、いま流行の藤イスを買い求めたいと存じますがいかがでしょうか」と。するとご前さんは「余分の金をほおっておくとはもったいない。よきやに計らえ」と、おうように「許可」を与える。こうして求められた藤イスは「事務所は狭くて置けませんから」と、ご前さんの部屋を借していただくよう「お願い」して運び込まれる。とたんにカミナリはピタリとおさまり、平和な日々にかえったという。

カミナリは、ご前さんの「欲求不満」を解消させることにも役立ったわけである。どんな人間にも起こりがちな精神のバランス失調を、ご前さんは独特の方法で克服する道を開発していたのだった。

私が小学校へ入学したのは、ご前さんが病氣になって家計簿の筆をとらなくなってからである。自由な活動力をそがれ

たご前さんは、おそらく再び手もと不如意の状態になつていただろう。

とつぜんご前さんは、入学祝いにクツを買ってやる、といひ出した。当時クツをはいて通学することも、クラスのなかでもかぞえるほどしかなかった。それほど高価な、上流子弟の象徴だった。ご前さんのおかげで、形だけその仲間入りをさせてもらった。私は、母にいつけられて、クツのお礼を言上したことを覚えている。ご前さんは、ことのほかご氣げんさんだった。

が後年、クツの話が出たとき父は、ご前さんの命令で身分不相応な物を買わせられたと、ニガ笑ひしていた。代金は父に払わせて、ご前さんは如才なくいい子になりすましていたのだった。収入が乏しくなっても、秋の水に散る木の葉が自然の流れに身を託するように、こだわりのない境地に安住して、相変わらず氣前よく散じていたのであろう。

ご前さんは、自ら「拙黙」と号し、あるいは「楓水」とも称した。法号は「寂達社静譽雷阿」である。ことばの一字一字に、ままならぬカンシヤク玉の本性を自覚し、かつこれをいたわりつつわが境地を開拓しようとした、求道者の足跡を感じさせる。「カミナリおやじ」と呼ぶだけでは、やや皮相のようである。しいてアダ名をつけるのなら「タヌキおや

じ」の方が、より真実に近かつたのではなからうか。

× × ×

ご前さんのタヌキぶりを見抜いたひとも、あつたらしい。スミにおけない「政治家」だとする批評や、さらにきびしく、途方もない「野心家」あるいは「野望家」であると毒づく声もあつたという。家計簿にも、それらしい片リンがあらわれている。浄土教報社の一年分誌代一円四十六銭「官報」の誌代三カ月分一円八十銭「宗教界」誌代半年分一円三十銭が、きちんきちんと払われている。宗門内外から広く宗教界、さらに中央政治、官界の動静にまで、ご前さんはくまなく目をそそいでいたようである。私はご前さんが、キリで官報をとじ、ときにはこれに読みふけていた姿を、おぼろげに覚えている。たいへん部厚くとしてあつたのが、幼な心に奇異に感じられたのであろう。

野心家、野望家と陰口をたたかれたのには、それなりの根拠があつたことを、後年父から教わった。

宗祖七百年遠忌のとき、宮中から勅諭のご沙汰があつた。その使者を京都駅に迎え、管長以下各山法主が人力車に乗って、知恩院まで一大パレードを演出することになった。

各山法主の車は、その序列の順番で前後がきめられたが、ご前さんは、黒谷法主の地位は伝統的に各山の最右翼であ

る、と主張してやまない。主張がいれなれないことがわかる
と、例の通りカミナリを暴発させる。

困り抜いた父は頭をひねったあげく、長年ご前さんの人力
車を引いてきた車夫の「菊さん」に、そっと秘策を授けた。

いよいよパレードがはじまり、管長の人力車が動き出した
時である。菊さんはいきなりカジ棒を持ち上げて、びったり
管長の車のうしろにくっついた。宗門の交通秩序を乱す、大
それた「道交法違反行為」である。が、どうしようもない。
宗門の役員連が歯ざしりするのをしり目に、パレードはその
まま華頂山へ。ご前さんが各山法主の先頭に立って意気揚々
と乗り込んだ光景がほうふつされる。

はたせるかな、ゴウゴウたる非難の声である。ご前さんは
完全に「野望家」のレッテルをはられてしまった。次期管長
をねらって許せぬ陰謀をたくらんだ、というわけである。直
接の非難は父に集中し、さんさんツルシ上げ、コキおろしの
目にあったと、後々までコボしていたことである。

もちろんご前さんは、次期管長を自任する斗志に燃えてい
たのであろう。官報を購読し、法令の改廃、国会の論議、要
路高官の人事移動にまでまなこをくばっていたのは、時来る
日に備えたからにちがいない。ご前さんは、単なる「教団の
アクセサリー」たる地位を望んだのではなく、官僚支配の時

代に処して一宗の興隆をはかるため、自ら陣頭に立ってカミ
ナリをとどろかせ、大いに経論と抱負を実行に移す心を決し
ていたのである。大志に対する責任感とその使命感に徹し
た、偉大なファイトマンである。

廃仏毀釈の試練を乗り越え、狂乱怒濤の危機宗門を率いた
多くの明治高僧は、いずれもこのような隆々たる気骨の持ち
主であったのだろう。ご前さんは、その「高僧山脈」の一秀
峰であった。しかし、明治も末期へ移って世は太平ムードに
包まれ、宗門は七百年遠忌のお祭騒ぎに浮かれて、大器を正
当に評価する良識は失なわれていた。ご前さんはついに、そ
の「野望」を实らせる機縁に恵まれなかったのである。

大正二年五月十四日付けの家計簿に「五円・中西博士、去
五日診察料贈呈」と記されている。病状容易ならず、とうと
う名医の来診を請おたのだろう。そして同年七月の初めで、
記帳は打ち切られている。ご前さんは、それから三年後の大
正五年、暑いさなかの八月二十三日に七十三歳の生涯を閉じ
た。死の床で、ご前さんがこんこんと眠っているときとき
弟子の一人が立ったまま、打ちわで涼を送っていた。突然目
をあけたご前さんは、大カツ一声「無礼者ッ、すわってあお
げッ」と浴びせかけたという。カミナリ大僧正の臨終の一雷
であった。やがて、ご前さんの五十回忌と父の十三回忌が、
相ついでめぐってくる。

岩井智海大僧正

高橋良和

(中外日報社取締役)

今から四代前の浄土門主に岩井智海大僧正がある。

デップリと太ったまことに肉付きのよい体格で、まゆ毛が長く、やわらかい眼ざしはなんといってもその風貌は布教界の第一人者であった。この老大僧の声の美しさはなかなか有名があつて、さしずめ今の人たちのことばでいえばミリキがあるところである。

この老大僧は高座にのぼる前のたしなみというか起居動作はなかなか厳肅であり、引僧に従つて御仏前にすすんで三礼されるこの老大僧正のふるまいには心ならずも名優を思い出すにふさわしいようであつた。大向うから「成駒屋」とひと声かけなくなるくらいのすきのないおちついたものであつた。

けれど老大僧正も高座からおりて吾が部屋にかえつてくると案外せっかちな、なかなか氣むつかしいところがあつたらしく、時に待者が小言をくっている風景をみたのは二度三度ではなかつたのである。この老大僧正は堺の旭蓮社という寺が自坊であつたが、知恩院に晋山後満洲親教に赴いたのと、昭和十三年の三上人の大遠忌を病軀を押してつとめたのがその最後であつたようである。

さてこの老大僧の美声のことは定評があるので、古くからもっているわたしの讃仏歌集をみると、岩井智海の作曲

になる讃仏歌の曲集がある。凡そ老大僧正と音楽などは高嶺の花を思われるのであるが、事実とんだ間違いで、この老大僧正は音楽学校の出身という異色人であって、それもバイオリンを専攻したというから浄土門主といわれるこの老大僧正の地位を考へると首をかしげたくなるのも当然である。

そう



いうことから考えてみると、二十才時代の頃は明治でも日清戦争前の頃で、すでに西洋音楽を愛好して音楽学校に入って、バイオリンを専攻したなどは全く今日の時代ならイタリーに留学して本場のオペラでも学ぶほどの音楽家といえるのである。

ところでこの老大僧がいよいよ知恩院に入山して晋山式をあげたのであるが、それから二三日すぎた日である。

この老大僧正からの使いの人がわたしの社を訪ねてきたのである。そして古びたステッキ一本、いや、古びていても一寸上等のステッキであるが、それと紙づつみをもってこれを真溪涙骨社主に渡してくれと何もいわずに立ち去ったのであるが、紙づつみのなかに一通の書面が同封されているのである。それを社主がひろげてみると、

自分は今回選らばれて浄土宗の管長になり、知恩院に晋山したが、何分にも学徳不備、その器でない。

そこで何かと先輩のあなた（社主のこと）の指導をうけたいので、もし自分のすることが間違っていたときは、このステッキでなぐりつけてもらいたい。

という意味が書いてあり、紙づつみには当時として驚くほどの金額がつつんであったのである。

まことに老大僧正の面目が躍っているようで、紙づつみならとも角もステッキ一本を備えての贈りものには如何にもこの布教の大家としての演出が行き届いて、頂戴した方でも親身になってお世話したいような気持になるのは当然である。

こうした点は心得たものであって、この老大僧正はその

後当時の満州国に親教に出かけ全国各地を巡錫して昭和十二年三月に修行される、鎮西、記主、聖観三上人の大遠忌を迎えるのであるが、その前にたしか横浜での親教中に高血圧で斃れて静養をつづけたのである。

ところが世間では病気の老大僧正が果たしてこの遠忌の大導師がつとめられるかどうか心配であって或は遠忌前に退山されるのではないかという噂が出たのであるが、幸にも老大僧正の病気は除々に快復に向って、杖をひきながらも寺内の歩行が出来るようになったので昭和十二年の春にはこうした噂も消えてしまつて、当時百万円の大遠忌といわれたこの三上人の遠忌がはじまるのである。

さてこの大法要中の一日である。たしかその最後の庭儀式だと思ふのであるが、行列が三門わきの女人坂を静々とのぼってきたのであるが、境内は全く人で埋まつて、さながらの法悦境を現出して念仏の声が流れたのである。

行列は女人坂をのぼってから参道を大殿にすすんできたのであるが、そのときわたしは、大殿の階段のそばでじっと立って待っていたのである。何百という全国から出仕の僧侶を従えた岩井門主の心境はどうだったろうと思うのである。

やがて老大僧正はやや心もち足をひきずっておもむろに

参道をすすんできたのであるが、たまたま大殿への昇り口のところに立っているわたしの姿をちらりとみたこの老大僧正は、心もちわたしの顔に会釈されたのである。わたしも合掌して頭を下げたとき、ふとわたしの心に去来したのは、そのときの会釈がなんだか眼で合図されたように思えたのである。

「そうだ」わたしは老大僧正のうしろ姿をながめながらすぐさま社へひきかえしたのである。そしてデスクに向うとただちに「岩井門主辞任」という記事を書いたのであった「きつとそうだ」そんなに思つて誰に聞くとなく書いたその記事、もし間違つていたなら大変でこと一宗の首長の進退問題だけに首になるかもしれぬ、そう思いながら記事を書き終えてその夜おそく老大僧正の下を訪ねたとき、わたしの「カン」は見事當つていたのである。

老大僧正はわたしに「今日遠忌がすんで辞任を申出た」と話してくださつたのである。わたしは老大僧辞任の第一報を「カン」で書いた冒険を思い出しヒヤッとしたけれど、あの大殿前の会釈のときの老大僧正の眼ざしを今思い出しなつかしく思うのである。でも老大僧正が亡くなってからもう二十年をすぎてしまった。なつかしい老大僧正のでっぷり太ったお姿が今でもはっきりと臉に浮かぶのである。

ご法語をいただく

十方に浄土おほけれども、西方をねがふは、十悪五逆の衆生もむまるるゆへ也。諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念にいたるまで、みづから来りてむかへ給ふがゆへ也。諸行の中に念仏をもちゆるは、かのほとけの本願なるがゆへ也。

(小消息)

普通に浄土といえ、今もなほ阿弥陀さまが説法を続けている西方極楽世界のことを意味します。しかし広い意味で浄土といえ、一般に仏さまの住んでいる清浄な国土のことをいいます。ところがある經典には一万一千という多くの仏さまの名前が列挙されていたり、また他の經典には東方に八万仏あり、西方に五万仏あり等といわれている位に、仏さまの数が多いのです。要するに仏さまは無数ともいうべき多数がおられるわけで、仏さまはこの宇宙一ぱいに遍在すると考えてもよいと思います。さうだとすると、仏さまの国土、つまり浄土の数も無限に多いということになるわけで、浄土も亦宇宙に遍く広がって

いるということになります。

しかし実際には、四方四仏、八方八仏、十方十仏等と説かれていて、それぞれの方向にそれぞれの仏さまがいるといわれています。もつとも四方といい、八方といい、十方ということは、すべての方向という意味が含まれているので、これまた総ゆる方向に仏さまがいて、現に説法していることを意味します。

それなら、これ程に数多い浄土の中で、ただ一つ阿弥陀さまの西方極楽世界をとりあげて、そこに往生したいと願うのは何故でしょうか。その理由は阿弥陀さまは、どんなに罪深く愚かな者でも救って下さるからであります。十悪五逆の衆生というのは、このままでは間違いなく無間地獄に堕ちる人々のことをいいます。しかし十悪というのは、殺生や盗みから初って、貪りや怒りや愚かさに至る十の悪のことです。貪りや怒りや愚かさのない普通人はいないとすれば、十悪の衆生とは結局は普通の凡夫のこととなります。ただ自分がこのような凡夫であるかないかを反省するかしないかの区別はありますが、このような凡夫が願って往生できるのは、西方極楽世界

しかないということになります。

また数多い仏さまの中から、ただ一つ阿弥陀さまだけに帰依するというのは、お念仏を申せば、たとえばお念仏の数の多少があつたにしても、必ず自來迎して下さるからであります。そしてまたそれぞれ多くの修行がある中で、念仏という最もたやすい行を行うわけというのも、阿弥陀さまがお念仏を申す人々を必ず救って下さると誓われ、その誓いですでに成就されているからであります。

世の中には幸福をさすけるという仏さまや病気を治すという仏さまを熱心に信仰する人がいます。しかし自分がどんな者であるかを反省もしないで、徒らに幸運を願い、病気を治したいと願っても、それだけでは無駄なことというべきでしょう。

仏さまの数はまことに多く、どの仏さまを信仰したからといって悪いことでありませんが、信仰の目標を極楽に往生することであるとさだめ、安心した毎日を明るく正しく生きてゆくことを願うならば、お念仏を申すより外に方法がないので、普通人の救われる道はただ念仏しかありません。

お月様の誕生

—中国の民話—

昔、昔のことです。空にはお日様があつて地上を照らしていました。でもお月様や星がなかったの、夜になるとあたりはまっくらとなり、それはそれはさびしくなるのでした。

ところがある晩のことでした。空に突然、とてつもなく大きな昼間のお日様と違ったゴツゴツしたかっこうの、ギラギラもえる別のお日様が毒々しい光を放って田畑の作物を枯らし、人々を苦しめ始めました。人々は夜も眠れず暑さと渴きで息もたえだえになつてあえぎつづけました。

「お日様は一つでたくさんだよ。」—そんな声があちこちで聞こえました。

そのころ、山のふもとに仲むつまじい若い夫婦が住んでいました。男はヤーラといって弓矢の名人、女はニーオという機織り上手でした。二人はこの新しいお日様で皆が苦しめられるのを見て悲しく思いました。ニーオは言いました。「あなたは弓矢の名人です。このお日様を矢で射落してしまつてはどうでしょう。きつと射ち落せて皆を救えますわ。」

そこでヤーラは弓矢を持って裏山にでかけ

ました。山のテッペンにのぼると、足をふんばつて矢をつがえ弓を力いっぱいひきしほりました。そしてお日様めがけて矢を放ちました。ところが矢は空の半ばもゆかずに落ちてしまいました。次は前よりもいっそう力んで矢を放ちました。これもだめでした。その次も、そのまた次も皆落ちて百本持つていった矢は全部使い果してしまいました。

ヤーラは地面に腰をべったりつけて考えこんでしまいました。

それからいく時経つたでしょう。突然ギイッとの岩がさけて、中から白いひげの仙人があらわれました。

「南の山に大トラ。北の山に大シカ。この肉をたべよ。そしてトラの尾の弓、トラの筋のつる、シカの角の矢で射よ。」

仙人はそういうが早いか岩の中に姿を消しました。

ヤーラは山をおりました。そしてニーオに事の次第を話して相談しました。

「あなたは弓が上手なんですからきつと射落せますわ。」

「前に大トラも大シカも射たことがある

が、やつらの皮はあつくてかたくて矢がつきささらないんだよ。大きな網で捕えるより他に方法はなさそうだ。しかしどこにそんな大きな、そして丈夫な網があるだろう。」

二人は考えこんでしまいました。

「そうだ。いいことがあるわ。」

ニーオは素晴らしいながら、自分の長い髪をなめました。

「わたしの髪であむのよ。」

さっそく髪の毛を抜いて網を編み始めました。二人は夜となく昼となく編み続けました。ふしぎとニーオの髪の毛は抜いてもすぐまたそのあとに新しい毛が生えてきて、網は一か月もたつと、それはそれは大きなりっぱな網になりました。

二人はこの網を持って南の山の上に行き、大トラの寝ている洞穴の入口をすっぽりかこみました。

トラが食べ物をあさりに出てきたとたんにとつと網の口が締ったのです。トラは大暴れに暴れたので山はひっくり返りそうでした。

二人は針でトラの目を刺し、頭を斧で砕いてひきずって家へ帰りました。

北の山のシカの洞穴でも同じようにしてシカをつかまえました。

ヤーラはそのトラとシカの肉を食べました。すると力が盛り盛りと湧いてきました。

トラの尾で弓を作り、その筋で弦を張り、シカの角で矢を作ると、それを持ってさっそく裏山へ登っていききました。山のとっぺんで矢をつがえ、弓をひきしほり、ねらいをさだめて、ひょーっと放ちました。矢は大空をどんどん速度を増して飛んでゆき、お日様に、ものすごく大きな音をたててあたりました。

するとパチパチと火花が飛び散りました。

ヤーラは再び矢をつがえてお日様を射しました。同じように大きな音をたてて当り、火花が散って、矢はヤーラのところに落ちてきました。こうして百回近くもつづけて射しました。そのうちにお日様のゴツゴツはみんな矢にあてられて角がとれ、丸くなりました。そしてたくさん飛び散った火花は、空でひとつひとつ輝き始めました。

でもお日様は丸くなっただけで、やっぱりもとのようにキラキラ輝き、作物は枯れ、人々は息もたえだえに苦しみ続けなければなり

ませんでした。ヤーラはしょんぼりと首うなだれ、山をおりてきました。

「ニーオ、どうしたらいいんだろう。くせものはあの光だ。あの光をさえぎるものがあるればなあ。」

ニーオはその時家の中で錦を織っていました。錦には一軒の家があつて、その戸口には桂の木があり、草はらには兎や羊が遊びたわむれているというものでした。ニーオは桂の木の下にヤーラと自分の姿を織り込むつもりでいっしょうけんめい織っていました。ふとヤーラの光をさえぎるものが欲しいという声を耳にして、

「この錦を矢の先につけて射たら、そしてらさえぎられますわ。」

ヤーラはその通りにやってみました。錦はお日様にうまくかぶりしました。するとどうでしょう。お日様はもう前のように毒々しい光を放たなくなりました。黄色のおだやかな淡い光に輝きはじめました。人々は喜びの歓声をあげました。そして月の中では、淡い光に見えかくれして兎と羊の動いているのが見えました。

悲劇の武将

松平 忠輝

林 左馬衛

(宮内庁図書寮)

諏訪の貞松院(浄土宗)を訪れた時、丈高く生い茂った唐葵が美しかった。和尚が好んで植えられたものであるが、それが、影のよくな人生を送った人にふさわしいのを、よいと思った。でも——、時期を少々すぎてしまっているのが残念だ、という話であった。

松平忠輝卿の墓所は、この寺の奥、和尚の居間に見守られた位置にある。乾いた苔に覆われた豪宕な自然石に、寂林院殿心誓輝窓月仙大居士と刻されている。それが——、徳川家康の第六子、つまり御三家の先祖たちの兄

にあたる人の墓であった。

忠輝は、諏訪で亡くなったのである。そして、時の諏訪藩主頼水候の奥方の菩提寺にあてられた、この寺に葬られたのであった。それは、庶民ののたれ死にとは同じでないとしても、家康の子としては例外的な、わびしい死であったように思う。

彼の生涯は、ただ影だけが生きているような人生であった。不本意というものが、もしこの世の中にあるならば、こういう運命を意味するのでもあろうか。ただ影だけの男となり果ててからの六十九年間、社会から忘れ去られての人生は、それが、罪人として監視をつけられ、ほとんどすべてを奪い去られての生涯であっただけに、ひとしお、長すぎた人生であったような気がするのである。

幼時より利発であり、長じて武将の才を謳われた彼が、尾州名古屋城に拮抗すべき北越の大城福島をゆだねられたのは、十九才の時であり、それを高田の地に移行して築城の規模になったのは二十二才であった。相談役として、佐渡奉行大久保長安、小田原城主大久保忠鄰らを控え、義父として妻五郎八姫の父伊

達正宗をもったこの青年武将は、本来戦国武将の棟梁となるべき人として育てられ、それ以外の準備をもたぬ人であった。

しかし、それが彼の不幸を予定していた。徳川氏が、忠輝の兄秀忠を盟主におおぎ、大坂夏の陣を始めた時、忠輝には、すでに暗い影がさしそめていた。忠輝は、攻撃軍の総帥である。しかし、彼の勝利が彼を反秀忠派の盟主とおおぐ大勢力に発展することは、秀忠にとって好ましいことではない。不安が、彼を失脚させる悪意につながっていったのは、むしろ自然ななりゆきであった。

夏の陣の後、秀忠と、たたかうこともたたかわぬことも許されぬ事態に追いこまれた時、忠輝は、自分の意志で人生をにぎりつぶし、世を捨ててしまった。二十五才の七月から、こうして、彼は、厳重な監視をつけられた世捨て人になった。そして、世間は彼を忘れ、世は、大平安佚をうたう江戸時代へとすすんだ。

天寿を全うして終えた時、彼は九十三才になっていた。若い日の彼を知るものは、もう誰も生きていなかった。世の中は、彼の生涯

の不当について考えるよりも、その時代なりの当面の問題に向って専念するのに忙がしかった。所詮、彼は、戦国時代のあまり有名でない武将であるにすぎなかった。

彼の絶望的な享樂のいつから茶の湯が浸みとおっていったものか、詳らかではない。しかし、貞松院に蔵された彼の遺品のほとんどすべては、茶道具である。しかも、茶道具の好みの歴史から考えて、諏訪配流後に流行した体のものは影を潜めて存在していない。彼が知っていた、そして行くことを許されていた茶は、古風な、人から顧られること少い茶であった。

嘗て豪遊することを好んだ彼は、身辺に、かの大久保長安の嫡男大久保藤十郎を、茶道として召しかかえていた。藤十郎が、父の死後発覚した罪を一身に負うて磔刑に処せられ惨死した慶長十八年の七月、二十二才の忠輝は、それを、どうしてやることも出来ず、ただ報告をうけなければならなかった。そして夏の陣の直後、藤十郎の茶の師匠古田織部も故あって切腹自決した。——二十五才の時、忠輝の周辺から茶が消えた。それと期を同じ

うして、彼の流浪の旅が始まったのだった。

松平忠輝の茶は、常識的な茶を否定した後、に敢て嗜まれた茶である。その晩年まで、彼は、自分に与えられた自分だけの茶に生きた。いまは茶の世界から孤立し隔絶された織



部時代の道具とむきあって、訪ねる人も稀な茶を好んだことが想像される。

彼の道具は、佗道具ではない。しかし、それだけしかなかったことも、また事実であった。そうした心の上での佗を、彼は、茶に托していた。——、波游の太刀と共に忠輝の名を残した相国寺の肩衝は現存しないが、遺愛

の茶臼と、鉄の大切合せ風炉釜と、それに、信長公伝来の銘野可勢の名笛は、今も貞松院に蔵されている。これらは、すべて同時代の名品をはるかに下位に位置づける稀代の優品であるが、それらのどこかに、心の、しかも大きな心の佗が、静かに湛えられているように思う。

忠輝の墓所は、時代に伴うひそやかな荒れを湛えて、今、眠るように静まりかえっている。墓前にすえられた、ざっくりとえぐり去られた石の具合も、素直さを湛えて、みる人の眼をつかれさせない。それは、洛北妙顕寺に存する尾形光琳の墓所と並ぶ、墓所の美の極を示しているように思われる。一方を、巧緻を極めた側の傑作として推すならば、これは、自然さを湛えたその味わいに於てすぐれた一方の雄と定むべきものであろう。——墓は、人の死後に属するもの、その過不足ない姿を後世に伝え得た人は、報いられた人と云うべきではなからうか。

生前、牡丹を、それも大輪の白い牡丹を好んだという。忠輝の墓所には、遺命によって植えられた牡丹が今なお咲きつづけている。



近代高僧伝

桑田寛随

大橋 俊雄

備後鞆の津、絵のような港

霞む白帆は夢心地

海は瑠璃色、緑の島に娘島田で舵をとる

とうたわれた風光明眉な鞆の浦仙酔島より北に凡そ十四キロ、久松城下に足輕大将桑田三五の長男として、慶応三年九月一日生れたのが、鶴であった。明治御一新のさ中にあたって、誰しものがあじわったであろう生活苦の中に、五人もの子供をかかえた両親は、長男と三男を寺にやり、次男を軍人とした。

鶴は十四歳のとき浦上光福寺鎌田寛樹のもとにやられ、剃髪して名を寛随と改め、ついで僧となった弟は真言宗の寺に入り、次男安

三郎は長じて陸軍中將にまですすんだ。幼にして聰敏な寛随は日夜仏につかえ、専心修業にはげんだ。この弟子の将来性に大いなる希望と期待をかけた祖考了瑞や師寛樹は、「このまま田舎でくちさせてしまうには、余りにも惜しい弟子だ」と、遠く京都に遊学せしめることになった。入洛した彼は先ず知恩院山内にあった西部大学林にまなび、傍ら智積院や泉涌寺の門を叩いて、みっしりと唯識を究めた。唯識三年俱舍八年といわれる至難な学問を是我非でもやりとげたいと願う彼は、これのみでは満足することなしに、宗学本校が東京に設けられるや、卒先上京し、ここで

も唯識を学んだという。全く彼は唯識のとりこになっていた。何事にも徹底してやらなければすまないという彼の気性は、このようにしてつちかわれた。どこかに一本すじが通っていた。生来悪筆で、特に青年時代同僚たちから悪口をたたかれた寛樹が、後年「天遊」と号し、しかも能筆家と言われるようになった背後には、なにくそ誰にも負けるものかという負けじ魂がひそんでいたからであった。

明治二十七年七月宗学本校専門科唯識部の業を卒えるや、大阪支校教授として教鞭をとることになり、三十年には師籍光福寺の住職となった。しかし福山在に寺をもったところで、それは住名にしかすぎない。本当に住持職をついだからには、寺の経営と檀信徒の教化につくしたいという彼の願いは、三十一年八月時の大阪支校長吉水賢融が知恩院執事となり、阿弥陀堂再建事務總監となつて、その後住に寛随を招いたことによつて実現した。かくして岸和田西福寺二十四世の法燈をつぐことになったが、数多い教授たちの中から、しかも在職短い彼が拔擢されたということ、如何に同僚たちの間で信望が厚かったか

を物語るものであろう。

その後大阪支校長に転じ、以来宗会議員、第六教区教務所長、知恩院法教科長を歴任して、大正十二年四月仏教専門学校長となった。まだ学校が鹿ヶ谷にあった頃であり、その在任中教室や講堂の新築に意をそそぎ、寺にあつては寺門の経営に一身をささげ、三十四年にわたる在住の間に本堂書院庫裡山門呑竜堂を改築、全く美観を一新せしめて、泉州本山として名をはずかしめないほどの努力をささげられた。ついで昭和六年長崎大音寺に転じ、同九年大本山百万遍知恩寺の法主にすんだ。

彼は温厚篤実、学徳兼ねそなえた徳者で、誰彼の差別なく、常にこやかに微笑みをたたえ、教化の手をささげられると共に念仏をとなえていた。百万遍知恩寺は七百年の昔、念仏の元祖法然上人がましました白河御房の御旧跡地、「縁あつて此処に來たからには、法然上人の御芳躰をしたい、生ける上人にお仕えするつもりで生涯を送りたい。念仏申させていだきたい。そして尊い念仏のみ教えを、多くの有縁の人たちにおわかちすること

こそ、私に課せられた使命と思います」と申され、日々を感謝のうちにおくられたという

日華事変勃発の際には管長の命をうけ、中国本土に渡つて、つぶさに戦跡を訪い、戦死者の靈をとむらつたが、風土の違いのためだろうか帰国ののち病を得、頼の浄泉寺で静養なされることになった。浄泉寺は師量譽寛樹の隠棲地、寛樹は大正七年六月の八十四歳で示寂なされた。彼がここで養生なされること凡そ二カ月、その後恢復されて百山に在ったとはいうものの、大津に病をやしない、大学病院に入院するなど、次第に病床に親しむ日が多かった。独り病床にあつた彼はひたすらに念仏を相続し、思いを遠く父母のもとをばなれて戦場に活躍する将兵の身の上を思い、一日も早く日華兩國が手をむすび、仏教をきずなとして平和な日々を來らんことを念じていたという。「せめて病床にある私ができ得ることは日華兩國の平和の祈願と、戦死病歿者各位のみ魂をおなぐさめすることです」と申され、日夜回顧をかかされることはなかった、と大津伝光院での生活を語った法弟がおられた。全く彼にとって、私をすて念仏を通

じての教化をしたいというのが念願であつた。いわば彼は自信教人信に徹した念仏行者であつたといえよう。

いよいよ臨終と聞き、駆けつけた法弟や親族の人たちは、師を中心として念仏を申されていた。静かにねむるが如く念仏していた師が、ふと今まで足もとのところで念仏相続していた法弟の一人が立ちあがろうとしたとき、口を開かれて「そのまま続けて念仏してくれ、たのむたのむ」と申された。その声は恰かも申されたというよりも、願われたといった方がよい口吻であつたという。かくして昭和十四年五月二十日、弥陀の慈光につつまれて安養の浄土に旅立たれた。時に世寿七十三。法名は濟蓮社博譽上人了阿栗堂寛隨大和尚。

創価学会の批判的解明（全日仏発行）

創価学会の实体調査に基づいてその教義と現況を解剖批判、仏教会話題の本書によって学会からの不安一掃（五一五〇・五〇）

申込先 法然上人鑽仰会

北海道

△北海道の教区は、これまで小樽以南を函
樽教区、以北を北海道教区といていた
が、このほど南部を北海道第一教区、北部
を同第二教区と改称した。

教区だより



行した。「浄土宗の教えは、どうして万人
に適しているのでしょうか」「法華経と浄
土経はどういう関係にありますか」「三部
経の説かれた決定的史論をご教示下さい」
などという設問十六をあげ、元祖上人立教
開宗の立場から、これへの回答を平易に述
べたもので、初版はたちまち売切れ、目下
再版発行中である。(頒価二〇円、申込所

函館市船見町称名寺中、浄土宗教学研究会)
△回顧すれば第一教区・第二教区ともに、三
十八年度中に区内寺院研心のため講習会を開
いて有意義であった。第二教区では春六月、
根室市大徳寺を会場として、主講に藤井実応
師を招き『現代に生きる浄土教義』なる課題
で講話をしてもらい、そのあと社会施設の慰
問もおこなった。

△第一教区では九月長万部町善導寺を会場と
して、仏大教授千賀真順師を招き『現代思想
と浄土教』なる題で話をしてもらい、ほかに
『戒と念仏についての一考察』(葛竜源)そ
のたの研究発表があった。寺院経営について
のシンポジウムもおこない盛会であった。

△また北海道の両教区は、教区としての東北
連合会に加盟がきまり、これで東北、北海道
六つの教区が一丸となって、宗門興隆のため
に努力することとなった。(須藤)

神奈川

△いささか旧聞になるが、浄土宗合同までに

至るこの教区の動きは、ナカナカに「骨っば
い」ものがあつた。例の七人組訴訟事件の中
核となつて、その主張や行動は「流石に関東
武著」と賑やかに教界スズメを喜ばせたもの
だ。

△教区統合 こんな騒ぎとはウラハラに、い
ざ合同が実現すれば今日的な合理性を発揮し
て教区統合をやつてのけた見事さは、いつ迄
もゴネた東京、大阪とはまことに対比される
ものだった。もつとも二三六対二一の数字に
よる圧力などと皮肉るむきもあつたが、そ
の実現に奔走した吉水智承、丸地弁信、犬飼
覚信、安部竜蔵、高麗義光師等に代表される
多くの人々の誠意を高く評価したい。

△教化運動の充実 旧両宗により改選と云う
形で合同後の初代教区長に再選された丸地弁
信師は「誠実、迅速、親切」をモットーに精
力的な教区行政をやり始めている。当初は大
教区には不似合な人事などの噂が飛んだが誠
実さと事務上の親切さ、衆知を集めて大勢を
洞察する賢明さなど全国教区長のなかでもト
ップクラスと称讃したい。三十八年度予算は
七十万円、この財源から年五回の布教パンフ

教区だより



レットを檀信徒用として無制限に各寺へと無料配布したり、教区の動静を知ることによって宗門意識を高めようと教区報を発行するなど、この人でなければ出来ない批判の余地を与えぬ活動奉仕である。こんな動きが檀信徒研修等、児童教化大会と今年の布教計画へ結びつけられてくるのである。すでに二年前から小田原組三十二ヶ寺は檀

信徒総代会を結成し大変な成果をあげ「念仏の声を聞くのなら鎌倉の十夜より小田原の寺へ」と云える程、しっかりと根を下している。こ

れも北村謙順、石川教寿両師の努力の結果だろう。ともあれ、大本山鎌倉光明寺を中心に京浜地帯を東に、天下の美観ハコネを西へと結ぶ神奈川は仏教界のモデル教区として前進している。宗政にも教学、布教にも新らしい力の躍動が今年あたりは見られそうだ。(シラハタ)

実 の で え か

— 高 橋 信 道 ノ ト よ り —

序 詞

精薄は清白なり
汚れなき故に
至純なるが故に

精薄は清白なり
愚かなる故に
足らざるが故に

されど精薄は
生きることに難し
世に生きることに難し

愚かなるものを

生かしめよ

喜ばしめよ

幸あらしめよ

ああ

精薄は清白なり

断 章

生命を育てる。只なんとなくそんな気持ちで、その日その日を子供と共に暮すだけだ。ガマンせよ。ガマンせよ。只黙々と実践し通せ。いつか子供の目が覚める。只実践だ。子供の目は見ぬふりしてちゃんと見ている。

一期一会、一日一日が創造であり、真剣勝負だ。それが精薄教育だ。

どなるより笑顔で。おこるより微笑んで。

子供になりきる。一諸に寝てふざける。

他人に見られたらはずかしい。が感じさせる教育、膚から膚への教育が特殊教育ではなかろうか。

一切を許し合う。そこに教育がある。

浄土を説いた經典

牧田 諦 亮

（京都大学助教授）

一

廬山の慧遠大師は、中国浄土教の祖と称されるが、しかし、今日の私たちの浄土宗の教えである口称念仏の祖ではなかった。慧遠の教えは般舟三昧經にもとづくものであるが、それでは私たちの浄土宗のもとづく經典は何であろうか。近頃インドに浄土教があったとか、なかったとかの問題がとりあげられているが、これは私たちにとっては問題ではない。たしかにインドは釈尊仏教の發生地であり、数多くの仏蹟が世界の仏教徒の巡礼をまちかまえている。しかしそこに行なわれた仏教を、中国や日本の仏教と比較して、その優劣を論ずることは、研究的には可能ではあるが、私自身の信仰の

立場からいえば、無意義であると言えるのである。セイロンビルマタイなどの南方仏教徒は自らの仏教は根本仏教といい、いわゆる大乘仏教を發展仏教と称してはいるが、実際はこれは墜落した北方仏教に対する南方仏教の優越性を示す辛辣な価値判断である。また北方の仏教徒は自らの奉ずる仏教を誇らかに大乘仏教と僭称し、南方のあくまで原始釈尊の教えのままに墨守しようとする仏教を小乗仏教と蔑称している。しかし、それぞれの土地と人々との間に成長してきた異質の仏教の優劣を、同じ基盤で批判することは凡そ無意味なことであることを、私は、昨年二月から三ヶ月のインド、東南アジアの仏教国の視察旅行で十分に知らされた。それと同

様に、インドから中央アジアの諸国を経、数百年の歳月を要して中国に伝えられて、外国人伝道者や中国人の知識階級によってはじめに中国語に翻訳された仏典——漢訳仏典を持った中国仏教は、その日から中国人の読み、考える中国仏教が成立するための出発点となった。翻訳された經典の原文や、その原文の成立した背景となった国々の仏教は、もはや中国人にとっては思索の限界を超えた存在となったのである。インド中央アジアの国々では、仏教思想の發展につれて、それに応じた新しい多くの經典が成立したが、中国ではそれらの經典の成立段階とは關係なく、多種多様な經典が時を同じくして漢訳され、その時は翻訳者によって選択される場合もあったであろうが、中国人の仏教徒の前に示された後は中国人の自由な選択にゆだねられる場合が多かったことは注目すべきである。

唐代の文人として、杜甫とならんでその名を謳われたのは白居易（七七二—八四六）である。香山居士と号し、また白樂天の名でより知られているこの詩人は、三十年に近い仕官の生活のうち、洛陽に悠々自適の隱居生活を送ったが、その自叙伝の中に「遊遊の外、心を釈氏に棲まして、小中大乗の法に通学す」（醉吟先生伝）と言っているほど、仏教の信仰に生きた晩年であった。「外には儒行をもって其の身を修

め、中には釈教をもって其の心を修め、かたわら山水風月歌詩琴酒をもって其の志を楽しむ」（醉吟先生墓誌銘）とも言ふまことに、人間として願わしい境地にあって生涯を終えた白樂天の仏教信仰の実態は、弥勒の弟子樂天と自ら記している画弥勒上生幀（弥勒菩薩が兜率天に上生したさまを画いたもの）讀などもあるが、彼の窮極の信仰は西方浄土往生にあったことを、彼の文中からも知ることができる。

開成五年（七四〇）三月十五日に造られた、高さ九尺広さ一丈三尺という大きな西方阿弥陀仏国の莊嚴をえがいた画幅の由来を書いた画西方幀記并讀の中に、彼の浄土信仰がみられる。晩年、中風を疾んだ白樂天は、俸錢三万を投げだして阿弥陀經、無量寿經の説明に準拠して、中央に阿弥陀坐像、左右に觀音勢至の二菩薩が侍り、天人眷属が圍繞し、樓台、妓樂、水樹、花鳥など七宝をもって嚴飾された図柄はまことに絢爛たるものがあつた。この画幅を彼が発願して造った時に、次のようにその緣由を記している。

わが本師釈迦如来の説に言わく、是より西方に十万億仏土を過ぎて世界有り、極樂と号す、八苦四惡の道無きをもっての故なり、其の国を浄土と号す、三毒五濁の業無きをもっての故なり、其の仏を阿弥陀と号す、寿無量願無量、功德相好光明無量なるをもっての故なりと。この娑婆世界微塵の衆生

を諦観するに、賢と愚、貴と賤、幼と老とを問わず、発心して仏に帰依する者は、先ず合掌して必ず西にむかつて拝むのである。厄を怖れ苦悩する者は口を開けばまず阿弥陀仏を念ずるし、金や土や石や織物などで仏像を作りさては水にうつし沙を聚めて遊戯する子供にいたるまで、仏像となればまず阿弥陀仏像を造るのがならわしであり、しかも自然にそうなっているものであり、ことさらにそうしむけたわけではないのだ。このように見てくると、かの阿弥陀如来にはこの土の衆生のために大誓願をたてられ、この土の衆生はかの西方浄土に大因縁のあることがあきらかとなってくる。東南北方過去現在未来に仏の多い中に、とくに西方阿弥陀仏のみに帰するのは、阿弥陀仏と衆生との深い因縁があるからだという。そして、白樂天が解した浄土とは、当然一代の文学者として、修辭上のかざりもあるであろうが「極樂世界清淨の土は、もろもろの惡道及びもろもろの苦悩の無いところである。願わくば老身病苦の者は同じく無量寿仏の所に生ぜんことを」という讀からも、離苦得樂斷惡修善、この苦悩の世界からの脱出を願うものである。

この白樂天の信じた西方浄土は、当然に、無量寿經（曹魏・康僧鎧訳）と阿弥陀經（姚奉・鳩摩羅什訳）の經說によったものであり、白樂天にとって、西方極樂浄土は、口に南無

阿弥陀仏と唱えて、心から、この現實の苦悩の世界からの逃避脱出を願ひ、衆生が称念すれば、阿弥陀仏が感應道交して、青蓮台上、上品の仏国に願に随つて往生せしめたもうことを現在の身から尽未來際ののちまで仏に親近供養したてまつることを信ずるものである。

この称名念仏西方往生浄土の考えは、さきに記した慧遠の般舟三昧經によった念仏三昧の教えとは、余程その内容が異なっているし、その修行の方法にも難易の差がある。

中国仏教が翻訳仏教である以上、当然それぞれにもとづく經典（漢訳仏典）がある。白樂天のころに、中国人社会に普遍的に信じられていた西方浄土の教説の根拠となった阿弥陀經、無量寿經なども、翻訳以前の成立過程には關係なく、中国人の前に提供された中国語の經典漢訳仏典の中から、中国人自身の考察、思惟の中からえらびだされた（選択）ものであった。

二

仏陀所説の教法が、時を経て、地を異にして、種々な發展を遂げたことは言うまでもない。内外からの執着のきずなとりことなつて、現實の苦悩にみちた世界（穢土）に対して、ひろく仏陀の説法として信ぜられていた教説にのっとり、如法に修行して完成された世界、清淨莊嚴の世界、現實

の苦悩を超越してきずきあげられた理想郷が浄土である。その浄土の中にも、阿弥陀仏の浄土もあれば薬師仏の浄土もあり、弥勒仏の浄土もある。中国語に翻訳された阿弥陀仏の浄土を説き明した經典だけでも実に二七〇部にも達しているし、浄土といえは、阿弥陀仏の浄土を説き、阿弥陀仏の限りなき生命力（無量寿）限りなき生活力（無量光）にたすけられて、現実の苦渋にみちた世界から、理想の安楽国土、西方浄土に往いて生れるということのみを意味するまでに、中国人の間に阿弥陀浄土が信仰されたについては、応病与薬という、それぞれの病に応じた薬を与えるという医療の根本原則と同じく、人々の悩み、苦しみ、執着をとりはらうに適した心の処方箋として、この弥陀浄土教が中国人のからだに適應したものであったことが知られる。西方十万億土の彼方に極楽浄土があるという表現についても、善導大師が、末代濁世の世の凡夫は、相（じつさい）を離れては事を求めがたいからとくに西方とかぎって方を指し、相の浄土を立てて、これに心を住めて極楽の境界を体得せしめるとされたのも、対機説法、応病与薬の原則から出たものである。近代にいたって、この指方立相についても、西方浄土をそのまま現実の境界として認める立場、全く觀念の上にたったまぼろしの世界、或は娑婆即浄土のように、呼吸をし、ものを食べて生活

している現実の世界に極楽世界を建設しようとする考え（中共の仏教徒の極楽浄土の定義はこれである）など、いろいろな解釈の成立するものも、いわゆる宗乗とは別個に、如何に今を生きるかという切実な問題にとりくもうとする真剣な求道者の願いでもあるという点において、大きな意義を持つものである。この問題については、のちに善導大師の項で、詳しく記するであらう。

三

このような阿弥陀仏浄土を説いた經典は二七〇部もあって、漢訳大乘仏典の三分の一の量を占めているということからは、もちろん、翻訳以前のインド、中央アジアの諸地域における浄土教の発展を意味することはもちろんである。が、前述の理由から、今はこれについては論じない。望月信亨博士ら諸先師の研究によると、中国における弥陀浄土經典の最初の翻訳として挙げられるものは、後漢の靈帝の光和二年（一七九）に支謙が竺仏朔とともに訳出したといわれる般舟三昧經である。これは前号で廬山慧遠の見仏三昧がこの般舟三昧經によっていることを記したとおりである。

しかし、もっぱら弥陀浄土の教説を説きあかしたものととしての、正明浄土の經典としては、無量寿經の異訳である、同じ支謙訳の仏説無量清浄平等覺經、安息国の王子安世高の訳

出した仏説無量寿経が、両者ほとんど時を同じくして世に出たのが、最初であるといわれる。このような仏経漢訳の歴史は、東晋・道安の綜理衆経目録、梁・僧祐の出三蔵記集以下の諸経録などによっても窺うことができるが、しかしこれも一応の記録にとどまるものが多く、その記事を一概に信ずることはできない。たとえばこの支讖訳の無量清浄平等覚経にしても、現存最古の経録である出三蔵記集（卷二）には、西晋・竺法護訳として記されているのであって、歴代三宝紀や開元釈教録が誤まって支讖訳とし、ついに今日の大蔵経に支讖訳として収められているようなものである。

法然上人が浄土宗を立てるについて、所依の経論として択ばられたいわゆる浄土三部経についても、無量寿経に正依の康僧鎧訳をふくめて五存七乗の十二訳、観無量寿経に正依の曇良耶舎訳をふくめて二欠一存の三訳、阿弥陀経に正依の鳩摩羅什訳をふくめて二欠二存の四訳などの説が行なわれてきたが、必ずしも拠るべきものでないことはいうまでもない。それらについては専門的な著書について見るべく、今は省略する。

表紙の解説

シッダルタ太子の出城

ナーガルジュニコンダ出土

大正十五年、小学校の教師が偶然に見つけた南インドの仏教遺跡ナーガルジュニコンダは、エジプトのヌビアの遺跡同様に、数年後にはダムの水底に没してしまふ運命にあります。幸にも遺跡は小さな石柱にいたるまで小高い丘に移され、復元されて、地理的な条件を除いては充分に元のおもかげをしのぶことが出来ます。このダムの源となるクリシュナ河に沿って、西暦紀元前後の三百年程の間有力な王朝が次々に国を建て、ナーガルジュニコンダを始め、アマラヴァティなどに、一連の、主として石灰岩を材料とした彫刻を遺しました。北インドなどの彫刻が、寺院の壁石そのものになされているのと異って、この地方では建物をレンガで作リ、その側面などに彫刻がほどこされたやや薄い石灰岩の板を張ると云う形のもが多く、大塔「ストウーパ」なども同様の石で覆われています。従って割れ易い石灰岩の性質も手伝ってあまり大きな石片は残っていません。ここにあげたものも巾は五〇〜六〇センチ、左右には長く続いて、種々な仏教伝説がインド特有の空間を残さぬ平面彫刻の様式で描かれています。夜、ひそかに愛馬カンダカにまたがって城を出て、出家の第一歩をふみ出されるシッダルタ太子はこの他にも数多く刻まれています。

（佐藤良純）

◇よい子に よい本 よい家庭◇

二ツ折パンフレット

はなまつり

価
十円

B5判 四ページ 多色刷

割引 価

百部より 単価 九円五〇銭
三百部より 〃 八円五〇銭

(送料サービス)

竹中信常先生指導

めぐみ

価
百円
四十円

B5判 四八ページ

おやくそく・はなまつり・こどもの日
おぼん・おひがん・ねはんえ・じょう
どうえ・ひなまつり・みおしえ……
保育テスト 三二ページつき

発行所 東京都千代田区 飯田町1の21 大 道 社 指替・東京8247 TEL <332> 5944

編集後記

▽今回は、色々な方に、近
代の浄土高僧を偲んで頂き
ました。特に角野先生のは
興味ある読物として、一括
掲載させて頂きました。
▽高橋先生は、自分の接し
た高僧を、林先生は、茶の
湯に生きた人々を、夫々面
白く連載して頂くことにな
りました。ご期待下さい。
▽佐藤密雄博士は、今回大
正大学々長となられ、誠に
喜びに堪えません。浄土誌
上でもますますご指導頂き
たいと思っています。
▽佐藤行信編集同人は、先
頃、約一カ月の東南アジア
旅行から帰られました。四
月号より、その紀行を頂く
予定で、ご期待下さい。
▽今までは、仏教を反省的
に見てきましたが、三月号
では、前向きな「仏教はか
くある」を特集したいと思
っています。

「浄土」購読規定

一部定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年 一月廿五日 印刷

昭和三十九年 二月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

電話東京三三二局五九四四番
振替東京八二一八七番

大正大学

学長 佐藤 密雄 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東，右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って，穩健中正，操守高き学生を育成する事を目標とし，教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は，入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか，研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

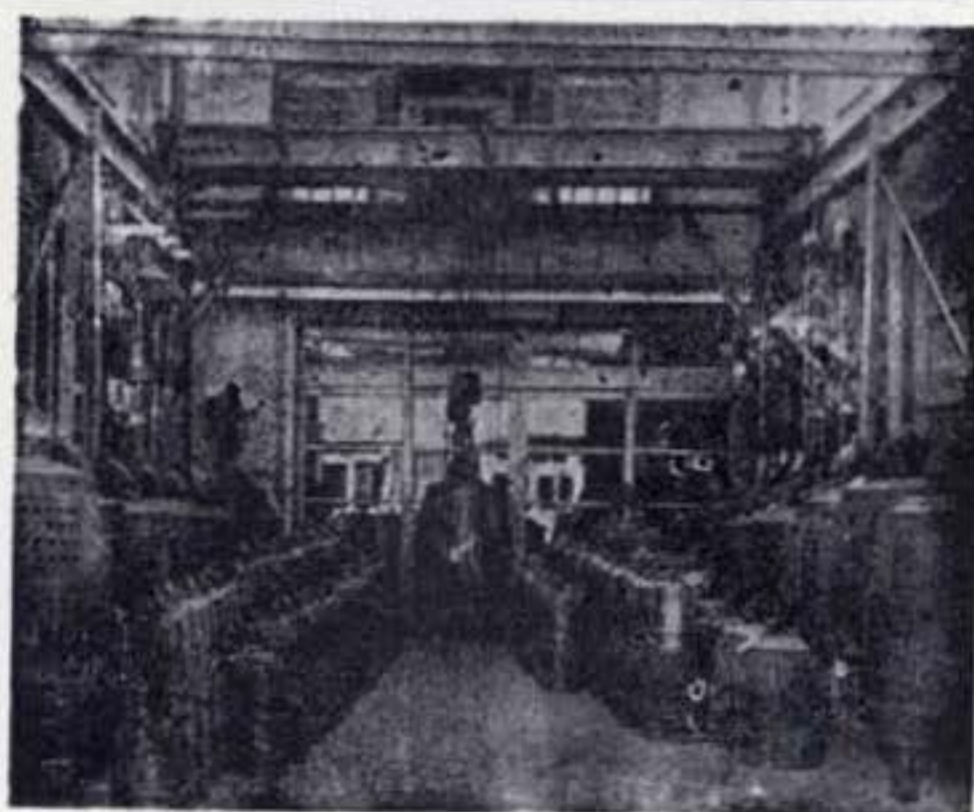
文学部＝国文学，英文学，史学，西洋哲学，宗教学
中国学，社会学，社会事業の8専攻

仏教学部＝仏教学，梵文学，天台学，真言学，浄土学の5専攻

大学院＝修士コース，博士コース（仏教学，宗教学
国文学）

昭和39年度1年の募集人員は200名，男女共学試験科目は，国語（漢文をふくむ）社会，外国語（英，独，仏のうち一つ）

試験期日 第1次 2月27日・28日（木・金） 詳細は入学案内
第2次 3月27日・28日（金・土） を参照のこと



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm～85cm) 在庫豊富

喚鐘 (12cm～51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞